

6月の栽培管理

リンゴ

○生育状況

本年の果樹試験場本場での「ふじ」の満開日は平年より6日早い5月1日だった(表1)。開花量は園地や樹によってばらつき、極端に開花量が少ない樹も見られた。

開花期は天候不順な日が多く、品種によって結実率に差がみられた(表2)。また、同一樹内でも開花時期がばらつき、幼果の肥大差が大きい。

表1 県南部の生育状況(果樹試験場本場)

品 種	開花始	満 開	落 花	開花期間
つがる	4月25日(-6)	5月1日(-6)	5月6日(-6)	12日(±0)
やたか	4月26日(-7)	5月2日(-5)	5月7日(-6)	12日(+1)
王 林	4月22日(-7)	4月25日(-9)	5月3日(-6)	12日(+1)
ふ じ	4月25日(-7)	5月1日(-6)	5月7日(-5)	13日(+2)

注：()内は平年比 平年値は過去10年の平均値

表2 県南部の結実状況(果樹試験場本場)

令和8年5月15、18日調査

品 種	調査芽数	花芽割合 (%)	結実率(%)		花そう 結実率(%)	平均結実数
			中心果	側果		
つがる	240	76.5	83.7	67.6	96.4	3.3
やたか	240	65.7	52.5	43.0	81.4	2.0
王 林	360	72.1	67.9	82.3	95.9	3.6
ふ じ	360	65.4	43.4	37.2	79.6	1.8

1. 摘果作業

肥大促進、花芽分化率向上のため、摘果作業は早めに実施する。仕上げ摘果では商品性の高い果実を生産するため、以下に示す果実を残すよう、よく確認して選別する。ただし結実が少ない樹は、通常は摘除する小さな果実等も残し、ある程度の着果負担を樹にかける(隔年結果防止)。

- ①できるだけ中心果で大きく、梗あ基部が凹み(肩が張り)、果形が良い
- ②病虫害や傷などの障害がない
- ③果梗が太く、段付きなど異常がない
- ④果そう葉が多い
- ⑤果台が長すぎない(2cm以下)
- ⑥中・長果枝(5~15cm)で、枝ずれが生じにくい位置に着果している

品種別の着果基準は表3を目安とし、収穫期の果実の大きさを考慮して適切な間隔を保つよう着果量を調整する。

なお、最終着果量は次の点に注意して調整する。

- 新梢伸長が劣り葉数が少ない、葉が小さい、葉色が薄いなど、樹勢が弱い樹では、着果量を減らし樹勢の回復を図る。
- 日当たり条件がよい枝では着果量を基準よりもやや多くし、下枝など条件の悪い枝では着果量を少なくする。

表3 品種別着果基準

品種名	着果基準
つがる、王林、秋田紅ほっぺ、ゆめあかり、秋しずく	3～4頂芽1果
ふじ、さんさ、シナノスイート、秋田紅あかり	4～5頂芽1果

2. ビターピット対策

「王林」、「秋田紅あかり」などのビターピットが発生しやすい品種や、例年発生が多い園地では、石灰資材を施用（苦土石灰や炭カルを100kg/10a/年）して土壌改良を行うとともに、定期的にカルシウム剤を散布する。

- スイカル：落花後10日から1,000倍で3回、その後、500倍で2回散布。
- セルバイン：落花後10日から800倍で3回、その後、400倍で2回散布。
- バイカルティ：落花後10日から1,000倍で5回散布。

いずれも防除薬剤に加用して散布してもよいが、7月～8月で高温が予想される時は薬害の発生が懸念されるので、防除薬剤を優先しカルシウム剤の加用を控える。

3. 不要な徒長枝のかき取り

主枝や垂主枝などの背面から発生した徒長枝は、日光や防除薬剤の到達性の確保とハダニ類の耕種的防除を兼ね早めにかき取る。徒長枝が木化する前は手にかき取れるため、摘果作業の際に一緒に行うと効率的である。ただし主枝の日焼けを防止するため、弱い徒長枝を等間隔で残しておく。

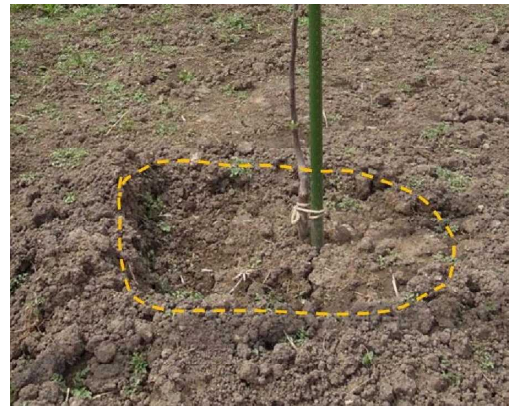
4. 土壌管理

6月は新梢の伸長期、幼果の細胞肥大期であり、養水分の吸収が盛んになる。この時期に土壌が極度に乾燥すると、生育の停滞や樹勢低下の原因となるほか、苗木では新梢伸長が停止し、二次伸長を誘発する。

極度に乾燥状態が続く場合は、積極的なかん水や草刈り、樹冠下への敷き草などの対策が必要である。

- ① かん水は晴天が3日以上続いた場合に実施する。なお、今年定植や

移植をした苗木や若木については、こまめなかん水で土壌水分の保持に努め、生育を確保する。



苗木周りに土手をつくりかん水

【かん水量の目安】

- ・ 苗木の育成畑などでは1回1㎡当たり20L程度（降水量20mm相当）
- ・ 定植苗木や若木では主幹周りの直径50cm程度の範囲に5L程度

- ② 草刈りは草高30cm以下で行い、樹と下草の養水分競合を避ける。樹勢の弱い樹は、樹冠下に刈草を敷いて急激な地温の上昇と水分の蒸発を防止する。

ブドウ

○ブドウの開花始め

< 県南部（果樹試験場本場） >

キャンベルアーリー（確定）5月31日（平年：6月6日）

巨峰（予想）6月6日（平年：6月12日）

○生育状況

初期生育は、「キャンベル・アーリー」等の中粒種、「巨峰」等の大粒種とも7～10日早まった。開花も6日程度は早まると予想されるため、作業が遅れないように準備する。

1. 新梢の誘引と芽かき

新梢の誘引は、開花前から始めて枝葉に十分に日光が当たるように棚面の空いたスペースに振り分ける。ただし、展葉7～8枚の頃までは、新梢の発生基部が柔らかく折れやすいため、注意が必要である。

芽かきは、樹の生育状況をみながら実施し、樹勢が弱い場合は早く、強く行い、樹勢が強い場合はごく弱く、もしくは実施しない。適正樹勢の場合は副芽やごく弱い芽をかく程度とする。

2. 無核栽培での花穂整形

無核栽培では、開花始期に花穂整形を行う。巨峰等4倍体大粒品種は、花穂の先端部を3.5cm、シャインマスカットでは4cm残し、支梗を取り除く(図1)。なお、ジベレリン(GA)処理の確認用として上段の支梗を2つ残す。



図1 花穂整形

3. 無核処理

GA処理は、満開時～満開3日後に1回目の浸漬、満開10～15日後に2回目の浸漬を行う(表1)。なお、1回目のGA処理前に花穂整形が終わらなかった場合には、主穂の先端部にGA処理した後に花穂整形を行う。

GAに加用するフルメット液剤(ホルクロルフェニユロン)の濃度は2～5ppmとするが、成木では2回目のGA処理時に加用しない。

表1 ストレプトマイシン(SM)およびジベレリン(GA)、ホルクロルフェニユロン(F)の処理法

処理時期	濃度
満開時～満開3日後	SM200ppm + GA12.5～25ppm + F5ppm
満開10日～15日後	GA25ppm + F0～5ppm

なお、発芽不良によって開花がばらついている園地では、1回目のジベレリン処理は満開になった花穂から順次行い、最初に処理した日から5日のうちに済ませる。それ以降に満開となった花穂は、作業が煩雑になるほか、収穫時の果実品質が劣ることから切除する。

4. 摘粒作業

1回目のGA処理から1週間ほどで、肥大や形状が不良な果粒の判別がつくようになる。2回目の処理の前に不良果粒を取り除く予備摘粒を行う。予備摘粒を行うと仕上げ摘粒の際に鉢が房に入れやすく、作業効率が上がる。

仕上げ摘粒では、「巨峰」で35粒、「ピオーネ」、「安芸クィーン」で30粒、「シャインマスカット」で45粒程度に調整する。

5. 土壌管理

開花期前に土壌が非常に乾燥すると、花ぶるい等の結実不良となる場合があるので、積極的にかん水を行う(リンゴの項を参照)。

○生育状況

県南部の「川中島白桃」の満開日は、平年より9日早くなった（表1）。粗摘果一巡後、6月初旬からは仕上げ摘果作業を進める。なお、県南部の硬核期の開始は「あかつき」で平年より6日早い6月11日頃、「川中島白桃」で平年より5日早い6月15日頃と予想されている（表1）。

表1 本年の開花期と硬核期予想（果樹試験場本場）

品 種	開 花 期			硬核期始めの予想
	開花始	満開	落花	
川中島白桃	4月15日 (-9)	4月20日 (-9)	5月1日 (-7)	6月15日頃(-5)

() 内は平年差

1. 仕上げ摘果

仕上げ摘果は**硬核期の前までに終わらせる**。果実は横～下向きで、大きく、縦長で縫合線を挟んで左右の比が6：4のもの（図1右）を残す。

飛び抜けて大きい果実、丸みを帯びた果実（図1左）、形状不良果、傷果、病虫害被害果や骨格枝先端部の果実は摘果する。

着果させる位置は、①短果枝の先端部、中～長果枝は枝の中央からやや先端部、②着生部位あるいはその近くに葉があるところとする。

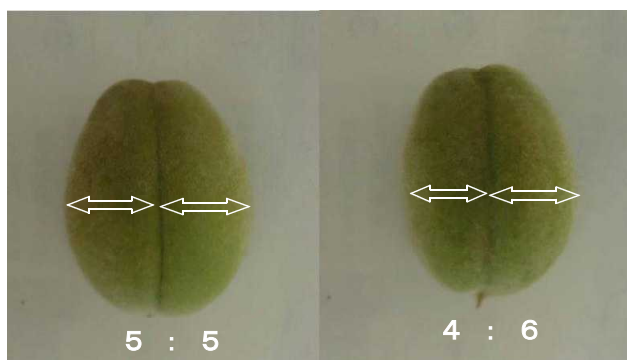


図1 双胚果（丸みを帯びた果実、左）と正常果（右）

結果枝別の着果量は着果基準（表2）を目安とする。幹周1cm当たりの目標着果量は、成木の適正樹勢樹において7～8果、若木では4果程度とする。また、仕上げ摘果では目標着果量の1割程度多めに残す。ただし、樹勢が弱い場合やはげ上がりが多く葉数が少ない場合は、基準より少なくする。なお、徒長的な長果枝では、多めに着果させて枝を落ち着かせ、修正摘果で調整する。

表2 結果枝別着果調節の目安

結果枝の種類	着果量
短果枝（10cm以下）	4～5本に1果
中果枝（10～30cm）	1果
長果枝（30～50cm）	2～3果

2. 新梢管理（成木）

樹冠内部が暗くなっている所を中心に、新梢の摘心や間引きを行う。ただし、過度に行うと樹勢低下を招くので、必要最小限にする。

枝の背面から発生した60cm以上の強勢な新梢は、硬核期直前に10cm程度残してせん定すると、その後に発生した副梢を翌年の結果枝として利用できる。ただし、樹勢低下防止のため、60cm未満の新梢には実施しない。

3. 袋かけ

袋かけは果面の荒れや裂果の防止、着色の向上、病虫害防止を目的とする。特に、例年、せん孔細菌病の果実病斑が問題となる園地では、仕上げ摘果を早めに終わらせ、硬核期前に被袋する。また、「川中島白桃」以降の晩生種は、果面の荒れが生じやすいので、商品化率向上のためには袋かけが有効である。

袋かけは薬剤散布から7日以内に行うが、7日以内に降雨があった場合は日数を空けず、すぐに行う。